

Japanese Literature ————— 41



中村真一郎  
福永武彦  
集



現代日本の文

41

現代日本の文学

---

---

中村真一郎集  
福永武彦

---

---

〈監修委員〉

伊藤 整

井上 靖

川端 康成

三島由紀夫

〈編集委員〉

足立 卷一

奥野 健男

尾崎 秀樹

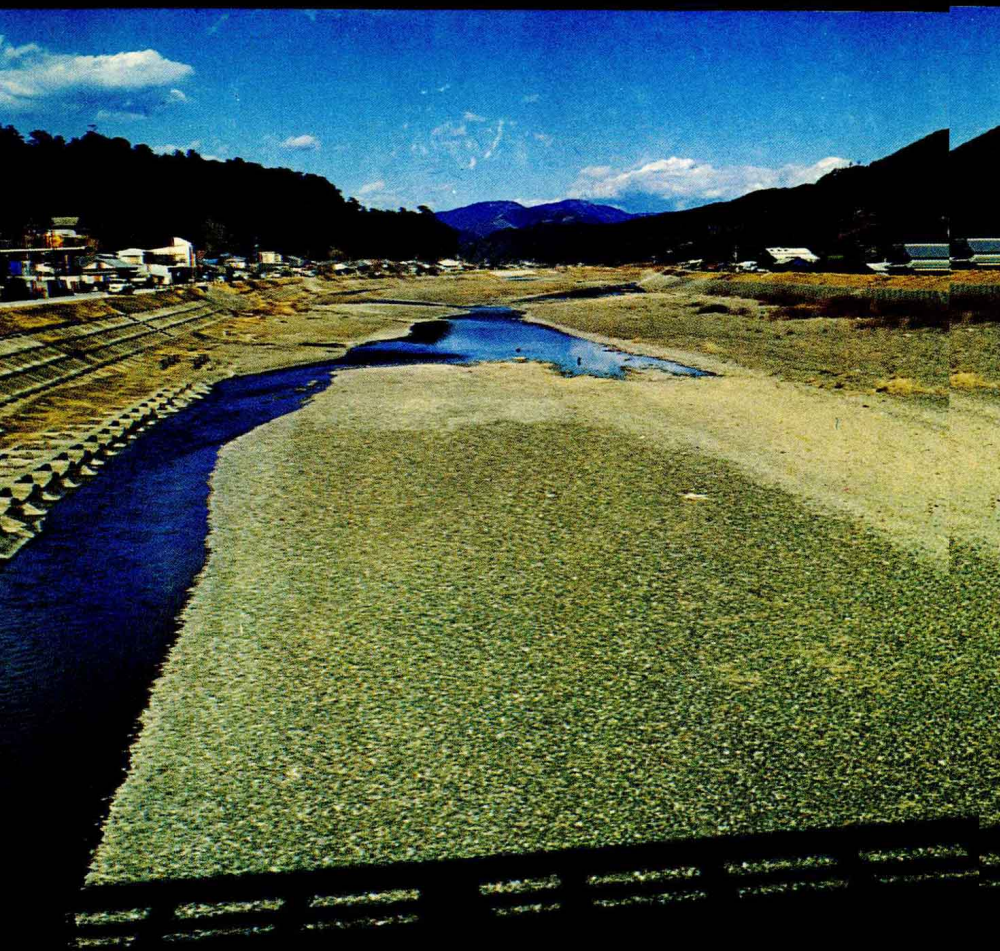
北 杜 夫

(五十音順)

学習研究社

# 中村真一郎文学紀行

静岡県周智郡森町を流れる太田川 太田川



それは、彼の生れた土地の風景である。そして彼の両親もまた、そこに生れ育った。幾代もの先祖以来、その川の両岸の部落が、今日の彼を生みだす、長い連りの糸を繰りつづけて来たのだ。……

(室内旅行)





右 幼少の真一郎が育った静岡県周智郡森町の家並（「死の影の下に」）

今、平等院の屋根のうねりや、三月堂の月光菩薩や、正倉院の楽器やの写真を見て、私の胸に自ずと湧き上る本能的な喜びは、確かに此の時の父のそうした世界に対する、激しい情熱の遠い反映であり、それが私の人生を自然に美術史や考古学やへ導いて行っただ。〔死の影の下に〕  
上 京都府・宇治平等院の鳳凰堂



三十分後に、ぼくはJ君と渡良瀬川の堤の上を、日光風ひかりかぜに煽あおられながら、散歩していた。広い川底は水が見えなくて、野原のように、地平線まで広がっている。芦を刈って束ねたのが、薄日のなかで茶色に光って列ならんでいる。野原というより冬の田圃たんぼに似ている。……（「感情旅行」）

栃木県・渡良瀬川わたらせがわ

日英同盟の時代の間人だった父が、「西洋」の風俗習慣を子供の私に<sup>しつ</sup>躰けようとした時、その西洋は実はイギリスだったのだし、私を「大学」に入れて勉強させようと考えていた父の脳裏にあったのは、オックスフォードのあの静かな石の村の情景であったのだ。

(「雲のゆき来」)

イギリス・オックスフォードの大学通り





……八月の末のある晩、おそく、私はオーストリア西南のザルツブルグの街の中央を貫流しているザルツアッハ河に沿って、ぶらぶら歩いていた。（「雲のゆき来」）






オーストリア・ザルツブルグの街を貫流するザルツアッハ河

……東京の残暑のなかで、現実の私は、それらの面影と別れたシャンゼリゼーの金色の落葉の街角や、ルンゴ・テヴェレの蔦のからんだ古いアパルトマンや、奈良のどこまでも続く白い道や、妙に埃っぽかった渋谷の明け方の舗道などを、ただ思い出しては動こうとしない。  
(随筆「夏の終り」)



パリ・シャンゼリゼー通り



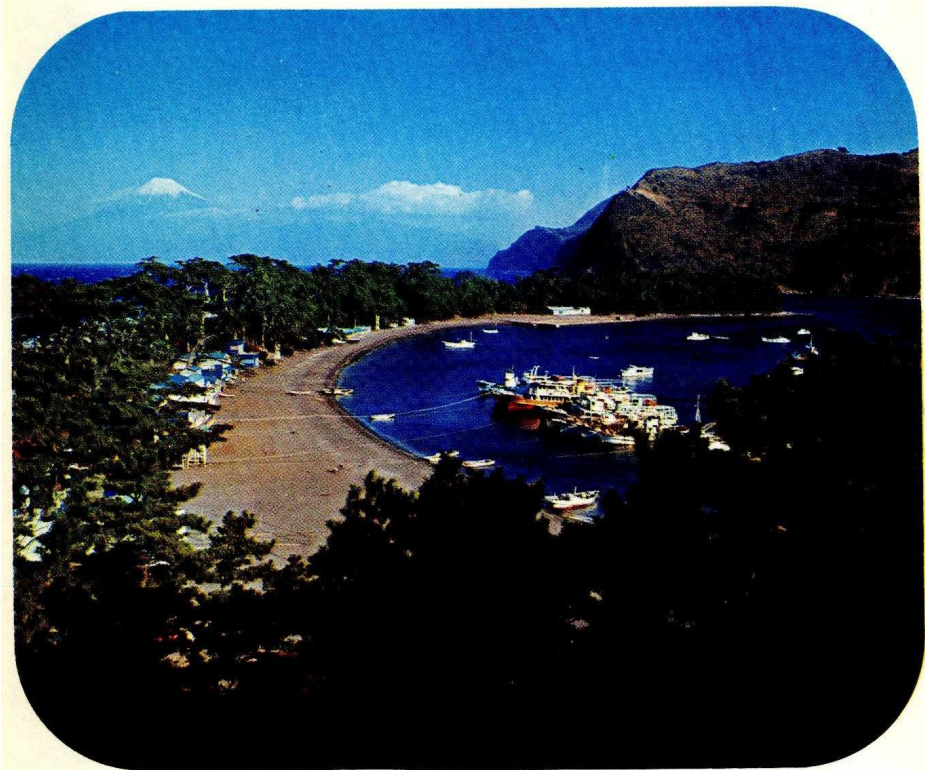
戸田は眠つてゐる漁師まち  
煙草やのかどに海が見えてる  
生簀いひに啼くよこしまな鴉のいくつ  
あつちへ行きたい と子供が指をさした  
通ひ汽船の汽笛がくもり空に余韻して  
港はひっそりかんと暮れてしまつた  
ああひとりぼちの身に  
この嘆きはいつまでだらう

（「ひそかなるひとへのおもひ」）



私は靈安室の横手にある裏門にも憑かれていた。病院の構内を一周して散歩道がある。この季節には、生い茂っていた夏草も枯れ、散歩道を縁取った檜や樺の木々も落葉する。 (「草の花」)

北多摩郡・清瀬療養所の秋。建物は靈安室



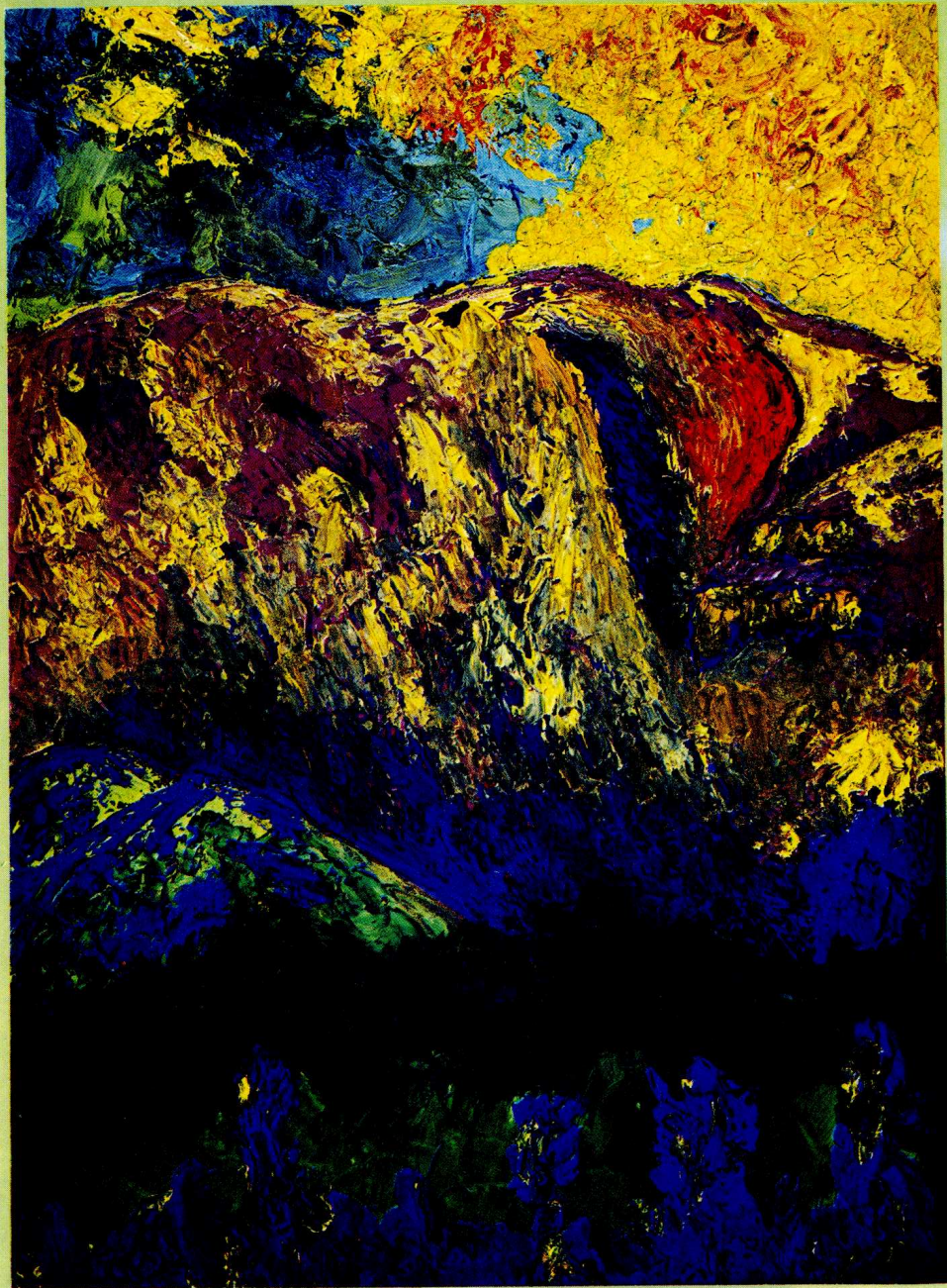
日村は伊豆西海岸の小さな漁村だ。細長い岬と荒れ果てた断崖とに入口を扼され、漣波に浮んだ油の汚点がひとりごちに伸び縮みしながらひろがって行くものうい内海。 (草の花)

西伊豆・戸田の静かな入江。遠方に富士が浮かんで見える

西伊豆・戸田湾

戸湾は蒼い水たまりのように見え、外海は陽光にきらめいて白っぽい河のように見えた。(「草の花」)





次第に西に傾いた陽の光を受けて、浅間の山肌が橙色に移っていた。（「草の花」）

武彦画「浅間山夕景」(油絵)





……道が更にゆるく右に曲ると、私の目安にしている落人部落が、海と山との間のそそり立つような斜面に見事な全景を展開した。緑の樹々に囲まれた瓦屋根がざっと十幾つか、海岸に沿った堤防から山の中腹まで層をなして順々に高まり、その古い瓦の一枚一枚が陽を受けて黒光りに光っていた。

（「海市」）  
右 伊豆・落居（作品では落人）部落の全景

私は一休みすると、身軽な恰好で表に出、コンクリートの坂道を登ってみた。部落の中は森閑として軒端を燕が行き交い、猫が日だまりで昼寝をしているばかりだった。（「海市」）  
下 落居部落の路地

